

備後の工業発展の背景は

福山大経済学部の張楓准教授(44)は、備後地方でものづくりが発展した背景を論文「備後地域機械工業集積の100年」にまとめた。中小零細から中堅まで多彩な企業が補完し合い、産業を支える構造が

福山大・張准教授が論文

あると分析する。張准教授は備後のものづくりを「丘陵型分業構造」と例えた。山腹から裾野に鋳物や溶接など専門的な加工技術を持つ零細企業、中腹に中小の部品メーカー、頂上に中堅以上の完成品メーカーが

ある。大小さまざまな企業が縦横のつながりを深め、工業が発展したとみる。

張准教授は2014年に本格的な研究を始め、100社以上への聞き取りを重ねた。論文はA4判239ページで1900年代から2000年代の機械工業の歩みをたどる。取材した企業の沿革や技術的な強みも紹介した。

「縁の下の力持ちのように、多くの中小零細企業が産業を支えている」と力を込める張准教授



一方、08年のリーマン・ショック以降は事業所や従業員の数が減っていると指摘。張准教授は「備後のものづくりの構造や魅力を広く伝え、人材獲得や技術開発につなげたい」と話す。論文は福山大のホームページで経済学部の欄から閲覧できる。(榎本直樹)